

研究ノート

非異性愛の女たちと家族との関係 —シンガポールと日本のケースの比較—

虎 岩 朋 加

はじめに

この研究ノートでは、シンガポールと日本で行った調査から、非異性愛の女たちと、かれらの家族との関係を、女性たちがインタビューにおいて語ったことに基づいて素描する。特に、この研究ノートでは、娘のセクシュアリティが規範とは異なるものであることを知った後の、母親の反応や、娘と母親との間の関係性に注目してそれらを素描した後、シンガポールと日本での、反応や関係性の違いがどこから来るのか、その背景に若干の考察を加える¹⁾。

シンガポールの女性たちのインタビューでは、娘がレズビアンであると知った時、母親たちによる、後に描くように過剰とも思われるような反応が、何人かの参加者によって語られた。また、母と娘の間に「聞かない、言わない」関係性が暗黙のうちに構築されていくようにも思われた。他方、父が過剰な反応を引き起こすことはなかった。母と父の反応の違いの比較については別稿に譲ることとする。

「聞かない、言わない」関係性とは、娘のセクシュアリティが規範とは異なるということは知っているものの、あたかも知らないかのように振る舞ったり、娘の彼女と顔見知りであるにもかかわらず、彼女と娘との関係性について公に問わないというような母親の態度を示す。また、最初の過剰な反応を考慮し、または、伝えていない場合は母親からの過剰な反応があることを予想して、母親を刺激することを避け、自分の同性のパートナーについて、あるいは、自分のセクシュアリティが規範とは異なるものであることについて敢えて沈黙を続ける娘の態度を示す。母親も娘も、互いの関係性の体裁を保つために、「聞かない、言わない」を実践しているようである。

日本の女性たちのインタビューの中には、日本の母親の反応に、シンガポールの女性たちが語っているような「過剰さ」は見出せない。また、母と娘の間に「聞かない、言わない」の関係性が構築されているような様子もない。もちろん、語られなかったからといって、それが不在であったということを示すものではないが、それでも、この違いはどこから来ると言

えるのだろうか。

この研究ノートは、2017年4月からComparing governance of lesbian communities in Singapore and Japanという研究課題のもとで行ったインタビュー調査の一部を素描するものである。インタビュー自体は、2019年4月に完了し、現在、データの分析過程にある。シンガポールでは、22名の参加を得た。また、日本では、32名の参加を得た²⁾。なお、研究参加者の匿名性を保持するため、本稿で使用されている名前はすべて仮名である。

家族をめぐるそれぞれの国の語りは主に、家族に規範とは異なるセクシュアリティについて伝えるか伝えないか、伝えた場合それはなぜか、伝えた後の家族の反応や現在の状況はどうか、家族との関係性はどうか変化したか、伝えていない場合それはなぜか、将来伝えるつもりがあるのかなのか、などをめぐるものである。上述したように、家族に対する自分のセクシュアリティの提示をめぐり（いわゆるカミングアウトをめぐり）、シンガポールと日本とでは、語られる中で明らかにされたことに違いが見出された。

本研究ノートでは、シンガポールの女性たちにより語られた家族、特に、母親との関係性に注目し、その語られた内容を素描する。また、同様の語りが、日本の女性のインタビューには欠落していることから、その背景の一部を説明するものとして、シンガポールと日本の住宅事情に注目して、若干の考察を加えたい。

1 激しい反応を見せるシンガポールの母たち

娘が、自らのセクシュアリティが規範的なあり方とは異なることを伝えた時の何人かのシンガポールの母たちの反応は、とても激しいものであったことが、参加者たちの語りの中に示された。この激しさは、日本のインタビューの中には示されていないものである。インタビューの中に示されていないからといって、とても激しい反応が不在であったとは断言できない。そのことが示す事実は、ただ、語られていないだけ、ということだからだ。それにしても、シンガポールの母たちの反応の激しさは、日本の母たちの反応の激しさが示されていないことによって、余計に際立つものに見えてくる。

エミリーの母の反応は、エミリーによれば「悪い」ものだった。エミリーは、インタビュー当時、27歳、両親と暮らしていた。ある日、エミリーは、お付き合いしている女性とインターネット通話をしているところを、母親に見つかってしまった。母親は、エミリーに「この人は誰なの」

と迫られた。「本当にばかげたやり方で見つかってしまった。この日、私の家族にとってすべてが変わってしまった」と、エミリーは、その時のことを振り返った。彼女は、自分のセクシュアリティについて両親に知ってほしいと、自分から願って伝えたわけではない。インターネット通話の相手を見られて、「カミングアウトするように強制された」のである。「あんな会話になるとは思っていなかった。なぜって、私たちは、昔ながらの価値を重んじる家族だってことはわかっていたけれど、あれほどとは。もしわかっていたら、両親をあんな風に傷つけるようなことはしなかったのに」と、エミリーの語りは後悔の念を示している。

その後、母は、エミリーから彼女とつながる手段となるスマートフォンなどのデバイスを取り上げた。そして、エミリーを常に彼女の監視下に置くことにしたのだという。そうすることで、エミリーが、彼女と連絡を取る物理的手段も時間も母は取り上げた。最初の2～3か月の間、母は、エミリーに、一人で部屋にいることさえも許さなかった。エミリーは母と部屋を共有しなければならなくなったのだ。エミリーは当時、修士論文を書いていたのだが、母親の監視する中、居間で書かなければならなかった。

サンドラの場合も、エミリーと同様、自らの意思で伝えたのではない。サンドラは、インタビュー当時、28歳、両親と暮らしていた。付き合っていた女性と別れてしまい、激しく泣きながら帰宅してしまったことで、両親に知られることとなってしまった。母は、「娘がレズビアンなら、私はこの11階建てアパートから飛び降りるしかない!」と激しく泣いた。「自殺したとしても、彼女はゲイのままだから、問題は解決しないじゃないか」と父が言うと、「じゃあ、この子が死ぬばいい」と母は泣く。父が「彼女は人を殺したわけではないし、盗んだわけでもない。授業を休んだこともあるが、成績は悪くない。何を心配することがあるんだ」と聞くと、母は「だけど恥ずべきことだ」と、サンドラにとって決定的な言葉を放った。母の「恥ずべきこと」という言葉は、サンドラに大きな影響を与えることとなる。

エミリーと同じく一人っ子であるニコールは、インタビュー当時47歳、パートナーと一緒に暮らしていた。ニコールによれば、彼女は、17歳の時に突然、「嫌な女 (a bitch)」になる。その変化に驚き、理解に苦しんだ母は、ニコールにうるさく問いただした。「あなたの何が問題なの」。最終的に、ニコールは根負けし、「自分はゲイだと思う」と母に告げた。「じゃあどうしたいの」「わからない。どうすればいいの」とやりとり

を続けた後、ニコールの母は、ニコールを精神科に連れて行ったのだったが、精神科では、「娘さんには何も問題ありません」と、ある意味当然のことを精神科医に伝えられる。ニコールによると、それは、母にとっては満足いく回答ではなかった。なぜなら、母にとっては、ゲイであることは「間違っている」からだ。精神科医は、ニコールに睡眠薬、抗不安薬を処方したが、結局、その薬を飲むことになったのは、母親の方だった。17歳の時に、カミングアウトをして、その後5年間、ニコールの母は決して、ニコールのセクシュアリティを受け入れようとはしなかったという。

クララの場合、母の強いキリスト教信仰が、クララをトラウマ的な経験に追い込むこととなった。クララはインタビュー当時21歳、彼女も両親と同居していた。17歳の頃、クララが何かに悩んでいることを察した母は、クララになぜそんなに不満なのか、何度も尋ねるようになった。最終的に、母はクララがバイセクシュアルであることを知るのだが、母は、「そんなことありえない、私の娘なんだから、私が産んだんだから」と否定し続けた。クララは「十分に自分の言いたいことを言うチャンスが得られなかった」と述懐した。その後も、クララの母は、「聖書ではそれ（ゲイであること）は間違っている」と言い続け、聖書が非異性愛を否定していると解釈できる典型的な節をクララに対して読み上げ、お祈りを言うようにクララに強い、「あなたは自分自身じゃなくて、悪魔に乗り移られている」などと、クララに述べた。最後には、母はクララを教会へ連れて行き、牧師の前で跪かせ、お祓いを受けさせた。その間、クララは、震え泣き続けたという。この経験が、「物凄いトラウマになった」というクララは、その後、2年間、キリスト教がゲイをどう考えているのか、調べ続けた。

インタビュー当時、ヴァネッサは39歳、パートナーと暮らしていた。ヴァネッサは、過去のことを振り返る中で、母の反応に言及した。女性と連れ立って旅行に行ったことが母に見つかってしまったのである。

この女性と一緒にいるために国を出たとき、両親には、仕事でバンコクに行くと言ったのだけど、なんだか、私の母には超自然的力と能力があって、バンコクに行ったのはこの女性のためだったということがわかってしまった。母は私に白状するように迫り、結果、私は本当のことを言わなければならなかった。

嘘がばれ、両親は、それまで同じ家で一緒に住んでいた23歳の娘に対し

て、勘当する手続きをとったのだった。ヴァネッサは、家を追いやられ、しばらくの間、友人を頼りに生きていくことになる。

実際、勘当される可能性についての言及は、別の参加者からもあった。セリーヌは、インタビューに参加してくれた時点で、33歳、親と同居していたが、両親に自身のセクシュアリティについて伝えていないし、また、伝えるつもりもなかった。なぜなら、「最悪の場合、両親は私を勘当する」だろうからだ。「勘当 (disowning)」という言葉は、日本でのインタビューでは、語られなかった言葉である。もちろん、この事実をもって「勘当」は起こらないということではできない。言えるのは「勘当」は語られなかったということだけである。

以上で紹介した母たちは、いずれも、娘のセクシュアリティが規範とは異なることを知ったときに、大変に激しい反応を見せている。しかし、このような強い反応は、いつまでも続くわけではない。母と娘は「聞かない、言わない」の段階へとその関係性を移行させていく。あるいは、別の場合には、娘たちからすれば、自らのセクシュアリティについて明らかにしていなくとも、母は娘のセクシュアリティについてなんとなく知っている。にもかかわらず、そのことについて両者とも「聞かない、言わない」関係性を保持し続ける。

2 母と娘の間の「聞かない、言わない」関係性

「聞かない、言わない (don't ask, don't tell)」という言葉は、インタビューの中で、ハンナが使った言葉である。ハンナは、インタビュー当時34歳だった。

両親は知らないけど、「聞かない、言わない」って感じだと思う。今までの彼女に両親は会っているけれど、ただの友達だと思ってると思う。ある意味、アジア社会では、衝突を避けるからじゃないかな。だから、母も本当に私にはそれについて聞かないし、私も、母に面と向かっては言いたくない。それに、愛する人を守る方法だと思う。彼らを傷つけることをわかっているなら、面と向かっては言わない。だから、両親はなんとなくそのことについて知っているんだけど、両親がそれを受け入れることを強いられなければならないということには巻き込みたくない。

このハンナの言葉に、この後に続くさまざまなインタビューの中に示さ

れる「聞かない、言わない」の関係性が端的に示されている。「聞かない」とは、ここでは、母たちが規範とは異なる、例えばゲイというアイデンティティを認めないということであり、娘のアイデンティティに直面せざるを得なくなるような話題には決して触れないという態度を現したものである。他方、娘たちも、母に面と向かって自分のセクシュアリティが規範とは異なることについてわかってもらおうとしたり、説明しようとしたりを避けている。自らのアイデンティティに母を直面させることを避けている。娘たちは、彼女を家に連れてきたり、送り迎えの際に家族が彼女と挨拶したり、家族の集いに彼女を同伴したりするけれども、どういふ関係性かということを明確にしなければならないような面と向かった話し合いはしない。そうすれば、母と娘は、娘のアイデンティティに直に向き合わなければならなくなるからだ。だから、母たちは聞かないし、娘たちも言わない。たとえ、両者の間に、娘のセクシュアリティは規範とは異なるという暗黙の了解があったとしても、そのことが表立って示されることはない。

「恥ずべきこと」だと痛烈な言葉を母から投げかけられたサンドラだったが、母との関係性はその後「聞かない、言わない」の段階へと移行していった。サンドラは母と二人で台湾に出かけたが、そこから戻る途中、母はサンドラに「あなたジェシーには何も買ってあげないのね」と言葉を掛けたと言う。ジェシーとはサンドラの彼女である。他方で、母は、「あなた、夫を得ることを考えるべきじゃないの」とも言う。こうした母の曖昧な態度について、サンドラはこのように述べている。

もし母が私にパートナーがいるか聞いたら、私はいると答えると思う。だから、彼女が私に聞いてくるのを待っているわけ。面白いことに、彼女はまだ聞いてこないんだよね。聞く機会は何度もあったのに、一度も聞いてこなかった。彼女次第なんだけどね。実際、以前に彼女にこうやって話したことがある。「私について質問があるなら、誰と会ってるかだとか、私に聞けばいいんだよ。友人たちに娘は結婚はしないの、とか言う必要ないよ」ってね。だけど、その時に、免責事項もちゃんと母には伝えたから。「私はオープンにするつもりだし、だから、お母さんも私に対してオープンになって欲しい。一方通行じゃダメなんだよ。両方向でないと」ってね。彼女は意味はわかっていると思う。(中略) 去年、自分の彼女から花束もらったのだけど、おかしかった。母が誰にももらったのか聞くだ

ろうと待っていたけど、結局私には聞いてこなかった。母は花に向かって、「お花さんたち、誰かがついに、あなた（サンドラ）が花をもらう価値があるって考えたんだね」って言うんだよね。だから私は母は知っていると思う。ただ、母はそれに向き合う勇気がないだけなんだと思う。

サンドラの母の「聞かない」は、徹底している。サンドラの言うように、「それに向き合う勇気」がないだけなのかもしれない。母は、決して、オープンな形でサンドラの生き方やあり方、サンドラが女性とお付き合いしている事実を認めることはしない。サンドラにお付き合いしている彼女がいることはほのめかされているし、彼女の名前まで母は知っているにもかかわらず、それに対して、母は正面から向き合えない。サンドラでなく、花に向かって話しかけるところに、そのことがよく表されているだろう。娘が「ゲイであること」を「恥ずべきこと」とみなした母は、やはり、娘のセクシュアリティが規範と異なることに表立って向き合えないのである。娘のアイデンティティに直面することは、また、「恥ずべきこと」という感情を母にもたらす。そして、サンドラも、母が聞かない限りは、言うつもりもない。自分のアイデンティティが「恥ずべきこと」と見なされ、それに大きな精神的影響を受けたサンドラは、同じことを繰り返すつもりもない。「聞かない、言わない」という段階にある母と娘の関係性がここに見られる。

娘を嚴重な監視下に置いていたエミリーの母は、その監視を次第に緩ませていった。こうした変化に、エミリーは、我慢し続けたら、母の強迫観念症的な反応も次第に治まってくかもしれないと考えているようだ。それまでは、「流れに乗ってどうなるかみようと思う」とエミリーは答えた。エミリーも、母に自分のアイデンティティに直面させることを避けている。「我慢」によって、すなわち、自分のセクシュアリティが規範とは異なることを母に直接的に示すことはもうしないということによって、エミリーは、ある意味で、母との間に「言わない」関係性を実践していると言える。

アシュリーは、インタビュー当時23歳、祖父母と同居していた。アシュリーは、自分の彼女のことを隠しているわけではないので、母もそのことを知っていると考えている。それでも、彼女とお付き合いしていることについて母と直接話し合ったことはない。ここでも、アシュリーのセクシュアリティが規範と異なることに直面することを避ける、また、直面させる

ことを避けるという母と娘の関係性が示されている。

「母はよくわかっていないと思う。いや、わかっているけど、直面したくないんだと思う。彼女とは12年間お付き合いしているし、自分の生活の中の一部になっているから。彼女は私の家族のお出かけにもくるし、私の母も、私の家を訪ねてきて、彼女も母を車に乗せて出かけることもある。彼女は私の日常の一部なんだけど、それを、母には直接に話したことはない」と言うクロエと母の関係性は、まさに、「聞かない、言わない」の段階にあると言えるだろう。クロエは、インタビュー当時41歳、パートナーと暮らしていた。クロエのアイデンティティを母は公に、娘に対してさえも、認めることはしない。

勘当の憂き目を見たヴァネッサは、ある日、前触れなく、父親から連絡を受ける。「母親と、しばらく連絡をとっていないだろう」と父に言われたヴァネッサは、「壊れた橋を修復しよう、今回は受け入れてくれるかもしれない」と考え、再び母に連絡を取るのだが、その期待は、完全に間違っていた。母は、ヴァネッサに、「彼ができたか」と聞いたのである。再び事を荒立てることをしなくなかったヴァネッサは、母には彼女が考えたいように考えさせることにしたのだった。自分のアイデンティティを母に再び提示することを控えさせたのは、他の娘たちが母との間に築く「言わない」関係性に見出せるものと同じ方策だと考えられる。

3 「聞かない、言わない」関係性についての若干の考察 ——日本との比較から

シンガポールでの調査の22名の参加者のうち、13名が、両親または母親に自らのセクシュアリティについて明らかにしている（22名のうち1名については、この件に関してデータがない）。また、明らかにしていない8名のうち、実に4名が、明確には伝えていないが、家族、または母親は、自分のセクシュアリティが規範とは異なることを知っていると思うと答えている。したがって、22名のうち17名の家族は、娘のセクシュアリティについてははっきりと、または、それとなく知っているということである。全く明らかにしていない4名のうち、2名の家族はイスラム教徒であることがわかっており、宗教が、その2名と家族との間の関係性を規定しているのが明らかになっている。残り2名について、1名は勘当されることを危惧して、もう1名は、家族との関係性を壊したくないことを理由に、自分のセクシュアリティを全く明らかにしていない。

他方、日本での調査の32名の参加者のうち、両親または母親に自らのセ

クシユアリティについて明らかにしているのは、13名であり、その数は過半数に達していない。また、明らかにしている参加者13名のうち3名は、インタビューの時点で異性とお付き合いをしており、家族に対するクシユアリティの提示の仕方は、異性との関係性を持っているという事実によって、家族の側にとってははっきりしないものになっているようである。このことは、例えば、イクとの次のような会話からわかる。イクはインタビュー当時30歳、両親と同居中であった。

- 虎岩 ご実家はご存じなんですか。
 イク 散々言っってはいますけど、どこまで本気にしてるかどうか。
 虎岩 散々言っってはいる？ 女の子が好きなんだって。
 イク そうですね。
 虎岩 それ、カミングアウトしてるってことですよ。
 イク どうですかね。実は話があるんだけど、とかっていうカミングアウトはしてないです。
 虎岩 ではなくて？
 イク ではなくて。この子が好きとか、私、この子のこと、すごい好きなんだけどとか。
 虎岩 て、言う？
 イク 別に彼氏はいるけど、そっちは好きじゃないんだとかっていうのも言ってます。
 虎岩 でも、どの程度、理解してるかが分からない。
 イク 真面目に受け止めてくれてるかは分かんないですね。

イクが言う通り「真面目に受け止めてくれてるかは分かんない」、「本気にしてるかどうか」わからないとすれば、家族は彼女を異性愛だと考えている可能性もあるということである。とすれば、娘が非異性愛であるということを明確に知っている場合の数は、さらに減ることになる。

なぜ、シンガポールの場合、参加者のうち一部を除く全員の家族が、娘のクシユアリティについてはっきりと、またはそれとなく知っているという事態になるのだろうか。なぜ、シンガポールの場合、先に見たように、家族に告げた場合に、家族からの強い反応に出会う可能性が大きいのだろうか。また、なぜ日本の場合、過半数を超える参加者が、家族に黙っていることが可能なのだろうか。クシユアリティについて明確に話したとしても、それが、家族関係を揺るがすような事態となったという語りと

して、インタビューの中に現れなかったのはなぜなのだろうか。

このことは、シンガポールの参加者たちの家族との同居という状況と大いに関係しているように思われる。シンガポールでの調査への参加者のうち、当時、家族と同居している参加者の数は、22名のうち14名である。日本の場合、32名のうち家族と同居しているのは、5名のみである。このことと比べるとシンガポールでの家族との同居の割合の高さが分かる。

シンガポールの住居政策は、若い人々が一人暮らしをすることを大変困難なものにしているのはよく知られている。シンガポールでは、およそ8割が公営住宅に住んでいる³⁾。公営住宅を購入するには、結婚しているか、結婚することが決まっていなければならない。また、独身者が公営住宅を購入したい場合、35歳以上でなければ購入申し込みをすることができない。シンガポールの調査への参加者の中で、自分の住宅を持っていたり、パートナーと暮らしている参加者はすべて、インタビューに参加した時点で、35歳以上であった。35歳に満たない人々が、親のものではない自分自身の住居を持つための唯一の選択肢が、結婚（もちろん異性交渉）なのである⁴⁾。シンガポールでは、親からの独立と結婚制度が密接に関係した住居政策が採られていると言える。最近の政策変更で、独身者の公営住宅の購入を2名以上のグループでできるようになったが、それでも、購入する場合は、35歳以上でなければならないということに変更はない⁵⁾。また、民間住宅を購入するという選択肢もあるが、非常に高価であるために、若い女性たちには民間住宅を購入する金銭的余裕はない。このことから、35歳に満たない若い女性たちは、家族と同居し続けなければならない状況にあるということがわかる。シンガポールで、若い女性が独立した生計を立てることは、日本と比べるとずっと困難なのである。

また、こうした公営住宅の多くが、それほど広くないということにも言及しなければならない。したがって、家族間で秘密を持つことはなかなか難しい。シンガポールの多くの事例に見られたように、親が子どもたちの部屋に入ったり、娘を誰かが訪ねてきたときに同居する家族が気付かないことはなかったり、父親のアダルト映画のコレクションの存在を娘が知っていたりと、互いのプライバシーを完全に保つことができないような住宅の作りになっている。

日本の場合、こうした住宅政策は当たらない。シンガポールと比べて、若い女性たちは、民間のアパートを容易に借りることができる。実際、調査への参加者のうち、一人暮らしをしているのは20名にものぼる。家族に対して秘密を持つことは、シンガポールの若い女性たちに比べれば容易で

あるということが推察できるだろう。家族から距離をとって、独立して生計を立てることができるからだ。地方に住む若い女性たちも、どういう理由であれ家族との関係性に息苦しさを感じるなら、大都市に出ていくという選択肢もある。地方出身の9名の参加者のうち3名を除く全員が大都市圏に移住している。

シンガポールの若い女性たちには、家を出てどこか別の都市に移住するという選択肢はない。したがって、家族との関係性を、日本の若い女性たちが考えたり経験したりするようには、シンガポールの若い女性たちは考えたり経験したりすることができないということであろう。娘のセクシュアリティが規範とは異なること、娘が彼女とお付き合いしていることは、一緒に住む家族にとって、身近な、隠すことのできない、一大事なのである。娘が自らのアイデンティティを明らかにすれば、インタビューに見られたような母親たちの過剰な反応を引き起こしてしまう可能性が大きい⁶⁾。こうした状況において、家族間のコンフリクトを避けるおそらく唯一の方策が、「聞かない、言わない」ということであるというのも、この文脈において考えれば理解できる。日本において、「聞かない、言わない」という関係性が見当たらないのは、その方策を求めることに発展しそうな状況に、かれらがいないからだとも言える。かれらは、家族の知らないところで、家族と切り離された生活を送ることができるのだから。シンガポールの女性たちの状況と比べれば、自分の意志で隠し立てすることが可能な状況にかれらはいるのである。

おわりに

この研究ノートでは、娘が自分のセクシュアリティが規範的なものでないと家族に伝えた時の、シンガポールのデータに見られる家族の反応、特に母親の強い反応、そして、母と娘の間の「聞かない、言わない」関係性を素描した。また、母親の強い反応や、母と娘の間の「聞かない、言わない」関係性についての語りも、日本のデータには示されていないことも言及した。

シンガポールと日本の住宅状況の違いが、それぞれの国での家族の反応や、家族との関係性のあり方の違い、それをめぐる語りの違いの一部を説明すると考えられる。シンガポールの住宅状況が、セクシュアリティをめぐる母と娘の関係性のあり方に影響を与えていると考えられるのである。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP17K02091の助成を受けたものです。

註

1) 私たちの研究調査は、「非異性愛の女性」を対象としている。私たちは、研究費の申請の際、研究の対象となる可能性のある人たちのことを「レズビアン」としていた。しかし、研究を進めていくうちに、「レズビアン」という名づけが適切かどうかについて悩んだ。日本ではインタビューに参加してくれた人たちの多くが、「レズビアン」と自分を名指すことへのためらいを感じていた。また、シンガポールでも、「レズビアン」という言葉の使用を好まず自らを「ゲイ」とか「バイ」と呼ぶ参加者が多くあった。私たちは、こうしたことから「レズビアン」という用語ではなく、「異性愛ではない」または「非異性愛」という言葉をインタビューの中で使うようになった。この研究プロジェクトに関する別稿では、論文の中で「非異性愛の女性」という言葉を使った。この研究ノートでは、主に、シンガポールの参加者たちのデータを参照している。この研究ノートで素描する内容は、娘のセクシュアリティが、異性愛という規範的なセクシュアリティとは異なるものであるということが大きな焦点となっていることから、「規範とは異なるセクシュアリティ」とした。

なお、私たちは、本論文執筆者の虎岩朋加と共同研究者のKris D'Amuroを指す。日本のインタビューは虎岩が、シンガポールのインタビューはD'Amuroが担当した。

私たちは、2017年4月から、Comparing governance of lesbian communities in Singapore and Japanという研究課題に取り組んでいる。この研究では、非異性愛の女たちが、みずからを社会の中で見える存在としたり、あるいは、見えない存在としたりすることをめぐる、制度や社会やコミュニティと、どのように折り合いをつけたり、切り抜けたり、掛け合ったりしているのかを問うている。

2) 非異性愛の女の不可視性、そして、その結果としての、非異性愛の女たちを調査の対象とすることにともなう困難を以下の論文で論じた。虎岩朋加(2019)「日本の「非異性愛の女」の恐れと不可視性－調査研究への影響－」『敬和学園大学研究紀要』第28号、63-78頁。

3) Yue, A. (2012). Introduction. In A. Yue & J. Zubillaga-Pow (Eds.), *Queer Singapore: Illiberal citizenship and mediated cultures* (pp.1-25). Hong Kong: Hong Kong University Press.

4) シンガポールでは結婚は異性愛間のものである。また、イギリス植民地時代より受け継いだ刑法377A条により、男性同士の性的関係は最大2年の懲役刑に罰せられる。男性に限られる同性関係の違法性は、全ての同性同士の関係性に否定的なスティグマを与えていることは否めない。その意味で、シンガポールでは、社会によっても、また社会的規範によっても、同性愛は受け入れられていない。また、家族に対する社会的圧力は日本におけるそれとよく似ている。

5) シンガポールの調査への参加者のうち35歳以上の人たちの中で、パートナーと暮らしている人たちがいるのはこのためである。

6) もちろん住居をめぐる状況だけが、このような母親の反応を引き起こしているわけではない。この研究ノートでは、住居のあり方が、過剰な反応を避けることができない

状況を生み出していることを示唆している。過剰な反応がなぜ生じるかについての考察については、別稿に譲るが、Tang(2018)によるシンガポールにおける「規範家族」をめぐるイデオロギーが、レズビアン女性とかれらの定位家族との間の関係に及ぼす影響の強さについての議論は参考になる。Tang, S. (2018). Same-sex partnering and same-sex parented families in Singapore. In S. Hu & W. Yeung (Eds.), *Family and population changes in Singapore: A unique case in the global family change* (pp.180-196). London; New York: Routledge, Taylor & Francis Group.